

# 井戸考

宇野 隆夫

【要約】 人の生活に欠くことができないものの一つに水がある。特に定住生活を営み、都市を形成するようになると、水の重要性が増し、井戸を掘削して地下水を利用することが盛んになる。本稿ではこの井戸の型式と年代を検討した結果、日本の井戸の定着は稲作を基盤とする弥生社会の確立と密接な関係があり、以後の変化を、(Ⅰ)木組井戸を用いるが素掘り井戸が主体をなす弥生・古墳時代、(Ⅱ)木組井戸が主体をなす古代、(Ⅲ)石組井戸が主体をなす中世、(Ⅳ)石組井戸に加えて土製品組井戸が普及する近世・近代の四期に大別できることを明らかにした。また新しい型式の普及の過程と、普及にあたって主導的な役割を果たした地域とに着目し、各期の中にも画期を設定した。そして木組井戸が最も発達する古代前期の様相は木組井戸の普及が本格化する弥生後期以後の婦結、石組井戸が卓越する中世後期の様相は木組井戸の衰退がはじまる古代後期以後の婦結、コンクリート製の井戸が主となる近代の様相は土製品組井戸が普及していく近世以後の婦結と考えた。また弥生後期以後の動きについては畿内南部、古代後期以後の動きについては畿内北部、近世以後の動きについては、ふたたび畿内南部が重要な役割を果たしたと考えうるのである。

史林 六五巻五号 一九八二年九月

## はじめに

井戸考(宇野)

人が生きていくうえで必要とするものは衣・食・住をはじめとして多くあるが、なかでも水と食料とは不可欠のものである。そのため人類は古来、この二者を得るために、多くの工夫を積み重ねてきた。このうち水についてみると、その用途は飲用をはじめとする生活用水と灌漑用水とがある。そして、当初は自然の河川や池泉の水、もしくは雨水を利用していただろうが、定住生活を営み、都市を形成するようになると、井戸を掘削して地下水を利用することが盛んになる。

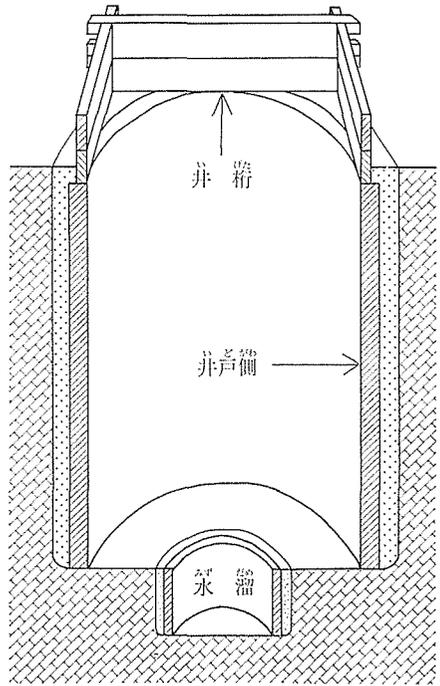


このように多くの先学の研究によって、現在すでに井戸型式、配置、祭祀等について色々のことが明らかにされている。しかし各時代・各地域において、多様な井戸が造られていたことが判ってきた反面、井戸のはじまりから現代の井戸に至る系統的な流れや地域色についての理解が深められているとは言えないであろう。本稿で私が考察したいことは、この点についてである。なお、このほかに井戸と住居との関係、日本の井戸と中国・朝鮮の井戸との関係、井戸祭祀の変遷のよう論じるべき点が多いがそれは別の機会に譲ることにする。

- ① 鳥居龍蔵「遺跡と清水湧出地との関係」(『先史及原史時代の上伊那』一九二六年)
- ② 中川直亮「横浜市鶴見区荒立に於ける遺跡——特に鐘状竪穴其他に就て——」(『史前学雑誌』第一〇巻第一号、一九三八年)
- ③ 末永雅雄「磯城郡敷島村粟殿出土板井」(『奈良県史蹟名勝天然記念物調査抄報』第二輯、一九四一年)
- ④ 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究报告第一六冊(一九四三年)
- ⑤ 末永雅雄編『橿原』(一九六一年)
- ⑥ 鏡山猛『北九州の古代遺跡』(一九五六年)
- ⑦ 日色四郎『日本上代井の研究』(一九六七年)
- ⑧ 山本博『井戸の研究』(一九七〇年)
- ⑨ 小郡隆「草戸千軒の井戸」(『考古学研究』第二六巻第三号、一九七九年)
- ⑩ 横田賢次郎「大宰府検出の井戸——とくに形態分類を中心として
- 」(『九州歴史資料館研究論集』三、一九七七年)
- ⑪ 黒崎直「平城宮の井戸」(『月刊文化財』一九七六年四月号)
- ⑫ 原口正三「古代・中世の集落」(『考古学研究』第二三巻第四号、一九七七年)
- ⑬ 水野正好「竹筒をのこした一井とその秘呪」(『草戸千軒』№36、一九七六年)
- 水野正好「三宝荒神符と天中の呪句」(『草戸千軒』№47、一九七七年)
- 水野正好「金貴大徳の呪句と埋井の呪儀」(『草戸千軒』№58、一九七八年)
- ⑭ 兼康保明「湖西高島の低地における井戸掘りと埋め戻し」(『民俗文化』第一九二号、一九七九年)
- 兼康保明「井戸における齋串使用の一例」(『古代研究』第一九号、一九八〇年)
- ⑮ 森貞次郎「弥生時代の遺物にあらわれた信仰の形態」(『神道考古学講座』第一巻、一九八一年)

## 二 型式分類

井戸の型式分類をおこなう前に、部分名称を示すことにする(第一図)。古代以後の井戸は次の三つの部分から成ること



第1図 井戸の部分名称

でないことが多く、また「粹」の字義は井壁保護施設の名称としてあたらなところがあるからである。

井戸の型式分類をおこなう場合に、この三つの部分を組み合わせると分類することは難しい。それは各部分ごとに多くの種類があるため、これらを組み合わせると分類が煩瑣となるからである。私は井戸を作る上で最も重要なものは、井壁の崩壊を防ぐ技術であると考え、井戸側の分類をもって井戸の分類の基準としたい。そして他の部分については、どの型式の井戸に、どのような井桁・水溜がどの程度の頻度で付属するかという表現をとることにする。

井戸の型式分類について山本博氏は、井戸側を(イ)板井、(ロ)石井、(ハ)地山井筒、(ニ)その他、に大別し、それぞれを細別する方向性を示している。他方、井戸の分類として(イ)深さ、(ロ)平面形、(ハ)井戸側の組み合わせ、(ニ)井壁の形状、(ホ)井戸側組立て法、による分類を提唱している。私は井戸の分類は井壁を保護する技術によるべきであるとする立場から、小都隆氏と同様に山本博氏の前者の方向性を受け継ぎたい。すなわち、井壁を保護する素材から井戸を、A類素掘り井戸、B類木

が多い。(一)水を汲む人の安全をはかり、汚水の流入を防ぐため地上に設ける部分、(二)井壁の崩壊を防ぐため地下壁面に設ける部分、(三)湧水を溜めるため底に設ける部分である。

この三つを山本博氏は、井桁、井筒、まなこ、として対して、小都隆氏は、井桁、井戸側、井筒とした。また横田賢次郎氏は後二者をあわせて井戸側としている。私は地上の施設を井桁、地下壁面の施設を井戸側、底の施設を水溜と呼称するが、その理由は形状に各種あり、井筒と呼ぶことが適切

組井戸、C類石組井戸、D類土器・土製品組井戸に大別し、素材の使い方から各類を細別することにする。

ただしこの方針については、検討しておかなければならない点がある。それは井壁を保護する素材や素材の使い方が部位によって異なる場合が少なくないことである。山本博氏は、上下で異なる場合を累積井筒、内外二筒からなるものを複筒井筒としている。これ以外にも稀に一つの井戸側を丸太剥き材と板材とを組み合わせてつくるような例もある。このうち補修や造りなおしによると考えうる例は本来の構造のものとは後から付加したものとに別けて分類するべきである。また上下で異なる場合は、上段が井桁であったり、下段が水溜であったりすることが多い。この場合には井戸側と認定できる部位の構造で分類をおこなう。なお中・近世の井戸では水溜が井戸側の最下段を構成する例が増すが、この場合にも最下段は水溜として井戸側から除く。このように認定しても、ごく少数ではあるが、井戸側が異なる構造の部分から成ると考えられる例がある。この場合には、井壁の主な部分を保護する構造によって分類し、亜式と付記する。

以上の方針によって日本の井戸は、次のように型式分類をおこなうことができる(表一)。

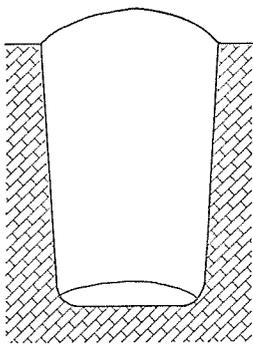
#### (1) A類素掘り井戸

井壁を保護する設備を設けないもの(第二図1)。この種の井戸は形状によって、円筒形、漏斗形、すり鉢形、二段掘り形のように細分することが可能である。しかし素掘りの井戸はすべて技術としては大差がなく、形は崩壊によって変わるため、形状による細別は原則としておこなわないことにする。

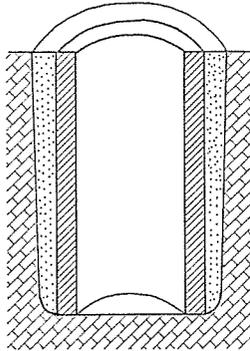
他方、東京都西多摩郡羽村町に現存する、まいまい井戸のように、井壁保護のため大きな、すり鉢形の穴を掘削し、螺旋状の道をつけて水溜を設置する例がある。<sup>①</sup>そこで、素掘り井戸については多少の形態の差があっても原則としてAⅠ類素掘り井戸とし、まいまい井戸にあたるもののみを、AⅡ類まいまい井戸とする。

#### (2) B類木組井戸

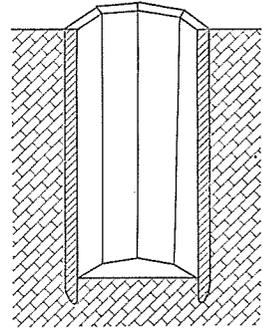
木材は腐朽しやすいという欠点をもつが、加工が容易であるため、多くの種類のものが造られている。



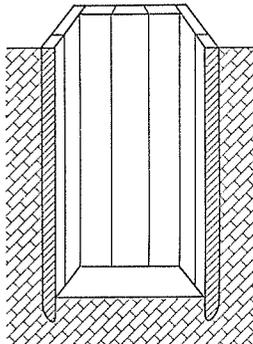
1 AI類 素掘り



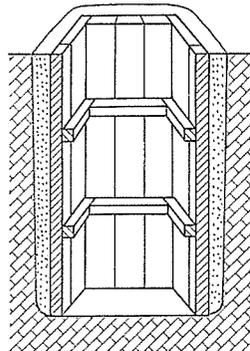
2 BI類 丸太刎抜き



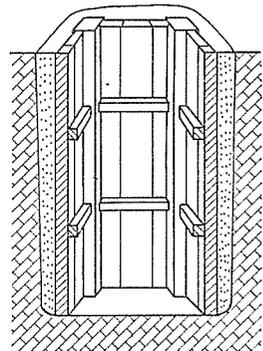
3 BIIa類 縦板組無支持



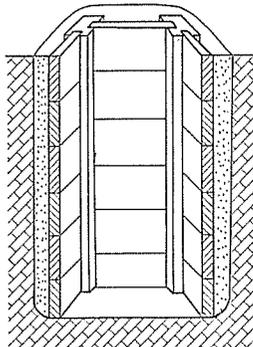
4 BIIb類 縦板組無支持



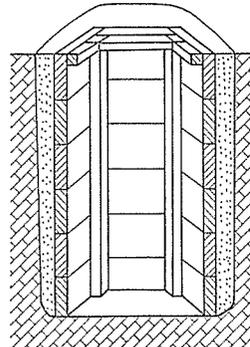
5 BIII類 縦板組横棧どめ



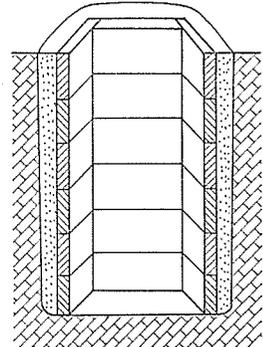
6 BIV類 縦板組隅柱横棧どめ



7 BVIa類 横板組隅柱どめ

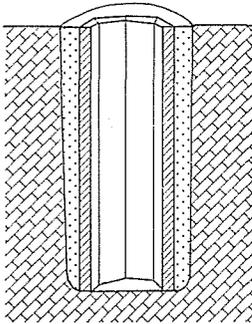


8 BVIb類 横板組隅柱どめ

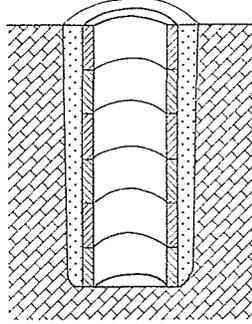


9 BVI類 横板井籠組

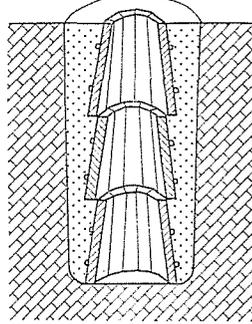
第2図 井戸の各型式 (1)



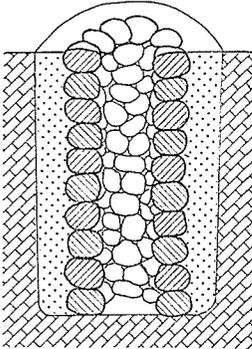
10 B VII類 縦板組柵どめ



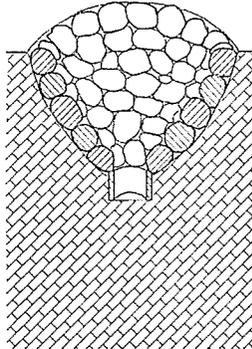
11 B VIII類 曲物積上げ



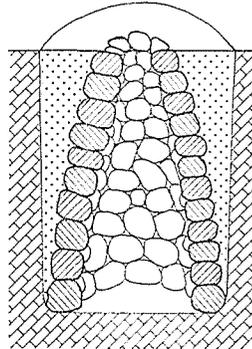
12 B IX類 桶積上げ



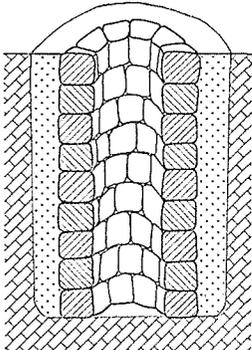
13 C I類 石組円筒形



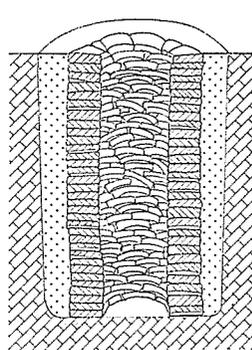
14 C II類 石組すり鉢形



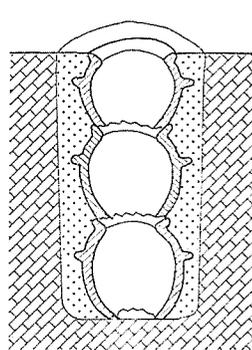
15 C III類 石組袋状



16 C IV類 切石組

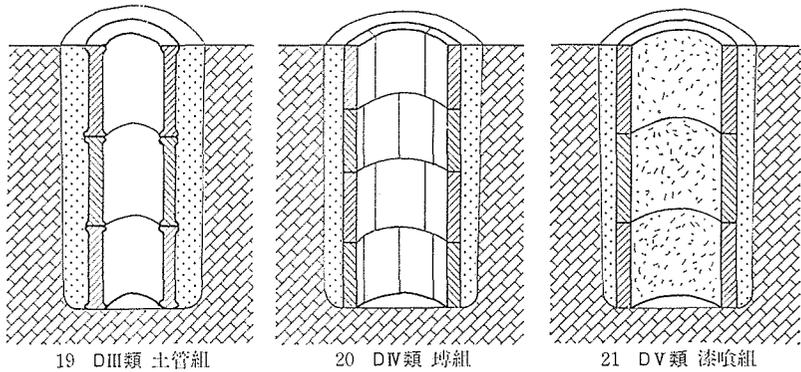


17 D I類 瓦組



18 D II類 土器組

第3図 井戸の各型式(2)



第4図 井戸の各型式(3)

表1 井戸の各型式一覧

型式	素材	特 徴
A I	な	素掘り井戸、形態には各種ある
A II	し	素掘り井戸、すり鉢形で螺旋状の道をつける
B I	木	丸太刳抜き材を用いる
B II		縦板組、保持する装置がない
B III		縦板組、横棧で保持する
B IV		縦板組、隅柱と横棧で保持する
B V		横板組、隅柱で保持する
B VI		横板組、仕口を枘組にして保持する
B VII		縦板組、枘組で保持する
B VIII		山物を積み上げる
B IX		桶を積み上げる
C I	石	石組、円筒形
C II		石組、すり鉢形
C III		石組、袋状
C IV		切石組、円筒形
D I	土器・土製品	瓦組、円筒形
D II		底を抜いた土器を積み上げる
D III		土管を積み上げる
D IV		埴(井戸瓦)を積み上げる
D V		漆喰を用いる

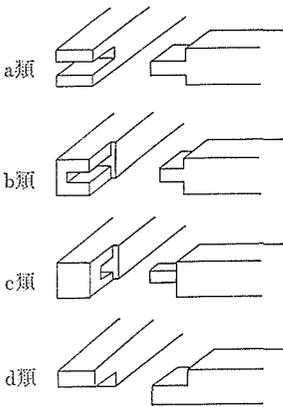
**B I 類丸太割抜き井戸** 丸太材を割抜いて井戸側とするもの(第二図2)。B I・a 類丸太一木割抜き井戸と、B I・b 類丸太分割割抜き井戸とがある。分割して割抜くものは、組み合わせの装置がないB I・b 1 類と、柄穴をつけて太柄と定めるB I・b 2 類とに細別できる。

**B II 類縦板組無支持井戸** 板材を縦方向に組んで井壁を保護するが、板材を保持する装置がないもの。板材を地中に打ち込むか、土庄によって保持する。平面形が円形のB II・a 類と、方形のB II・b 類とがある(第二図3・4)。なお本型式のみを平面形によって細別するのは、B II・b 類井戸が、弥生後期以後、長く用いられるB III 類縦板組横棧どめ井戸の原形と考えるからである。

**B III 類縦板組横棧どめ井戸** 板材を縦方向に組み、横棧で保持するもの(第二図5)。横棧の仕口については小都隆氏が、(a)目違い柄で組むもの、(b)目違い柄の凹柄が貫通しないもの、(c)包込柄で組むもの、(d)相欠き柄で組むものがあることを明らかにしている(第五図<sup>②</sup>)。また(1)横棧のみで支えるものと、(2)横棧の間に支柱を入れて補強したものとがある。これらの構造が判るものについてはB III・a 1 類のように表記する。なおこの種の井戸は平面が方形であることが多いが、稀に六角形、その他の形を呈するものがある。この場合にはB III・a 1 類六角形井戸のように示し、八角形を越える場合には円形とする。方形以外の多角形井戸についてはすべてこの方式で示す。

**B IV 類縦板組隅柱どめ井戸** 板材を縦方向に組み、四隅に立てた柱にとりつけた横棧で保持するもの(第二図6)。横棧は原則として隅柱の柄穴にさし込んで組む。なお稀に横棧を隅柱と縦板の間に狭んで支えるものがありB IV 類無柄井戸とする。B IV 類井戸は、B III 類縦板組横棧どめ井戸の改良型であろう。

**B V 類横板組隅柱どめ井戸** 板材を横方向に用いて積み上げ、隅柱で保持す



第5図 横棧組の細別

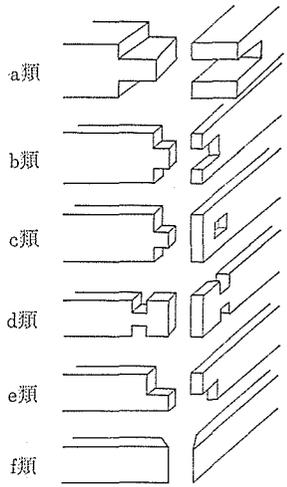
るもの。隅柱の溝に横板を落しこむB V・a類と、隅柱と裏込め土の間に横板を狭むB V・b類とがある(第二図7・8)。

**B VI類横板井籠組井戸** 角材または板材を横方向に用いて積み上げ、仕口を納組にしてにして保持するもの(第二図9)。用材の形状と仕口の組み方によって次の六類に細別できる(第六図)。(a)角材を用い目違い納で組むもの、(b)板材を用い目違い納で組むもの、(c)一方に凸納、他方に柄穴をつけて組むもの、(d)両方に溝状の切り込みをつけて組むもの、(e)相欠き柄で組むもの、(f)仕口を四五度に切つて組むものである。このほか、凸納の板材のみを組む例があるが、これはB VI・b類亜式とする。

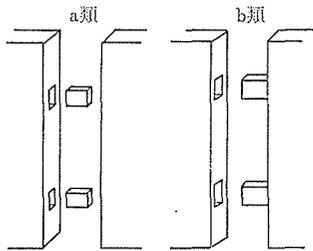
**B VII類縦板組納どめ井戸** 板材を縦方向に組み、納で保持するもの(第三図10)。両方に柄穴をあげ太納でとめるB VII・a類と、包込納でとめるB VII・b類とに細別できる(第七図)。なお本型式はB II・a類縦板組無支持円形井戸の改良型ではなく、B I・b 2類丸太分割抜き太納どめ井戸の系譜をひくものであろう。また稀に内側からタガ状の装置で保持するものや、穴をあげて紐どめにする例があり、B VII類亜式とする。

**B VIII類曲物積上げ井戸** 底板を抜いた曲物を積み上げるもの(第三図11)。井戸専用の本来底板がない曲物も存在する可能性がある。

**B IX類桶積上げ井戸** 底板を抜いた桶を積み上げるもの(第三図12)。井戸専用の縦板組タガ巻き例もある。



第6図 井籠組の細別



第7図 縦板納組の細別

(3) C類石組井戸

石は加工しにくく、堅固に積み上げるには相当の技術と労力とを要するが、腐朽しにくいという大きな利点がある。

C I類石組円筒形井戸 加工しない石を円筒形に組み上げるもの(第三図13)。なお稀に平面が方形のものがあり、C I

類石組方形井戸とする。

C II類石組すり鉢形井戸 すり鉢形の掘り方に裏込めをせずに、加工しない石を積み上げるもの(第三図14)。

C III類石組袋状井戸 加工しない石を円筒形に組み上げるが下部の径が上面の径より大きいもの(第三図15)。

C IV類切石組円筒形井戸 形を直方体に整えた石を円筒形に組み上げるもの(第三図16)。

(4) D類土器・土製品組井戸

土器・土製品は、腐朽しにくい点では石と同様の利点をもつ。また特に土製品は形を自由に作れる点で木の利点をあわせ持つと言える。

D I類瓦組井戸 瓦を小口積みにして、円筒形に組むもの(第三図17)。なお棧瓦を縦に組むものは以下で述べるD IV類

磚組井戸型式とする。

D II類土器組井戸 土器の底を打ち欠いて積み上げるもの(第三図18)。

D III類土管組井戸 土管形の土製品を積み上げるもの(第四図19)。本型式はD II類土器組井戸を改良したものであろう。

D IV類磚組井戸 平面形が長方形で彎曲する土製品(井戸瓦)を組み上げるもの(第四図20)。本型式はD III類土管組井戸を改良して大型の井戸を作りうるようにしたものであろう。

D V類漆喰組井戸 漆喰で井戸側をつくるもの(第四図21)。

なお本稿では井戸側の考察に重点をおくが、井桁と水溜らについても分類を示しておく。

井桁 (a)丸太割抜き、(b)縦板組、(c)横板組、(d)石組、(e)土器・土製品組、の五類がある。

水溜 (a)素掘り、(b)丸太刳抜き、(c)縦板組、(d)横板組、(e)曲物、(f)石組、(g)土器・土製品組、の七類がある。  
なお井桁・水溜の分類の細別は井戸側に準じる。

日本の井戸の大多数は以上の分類にあてはめることができる。ただし植物質の素材、竹材、転用材を用いるもの、および近世の東国で使用される丸太井籠組井戸のように、型式分類をおこなわなかったものもある。これは出土例の増加をまっ  
て、別の分類をたてるか、上記井戸の分類の亜式とするかを判断した方がよいと考えるものである。

① 日色前掲書。

② 小都前掲書。

③ 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館技官小林謙一氏に御教示を戴いた。

### 三 各型式の年代

本章では各型式の井戸が用いられた年代について検討を加えるが、その前にまず、いくつかの前提を示したい。

井戸の年代は出土遺物によって決定するが、遺物の年代が掘削年代を示すことは少い。そこで井戸の年代を表記するにあたっては、できる限り廃棄の時に投棄されたと考ええた遺物の年代を示すことにする。そして掘削の年代については、中世の石組井戸においてすら、使用期間は土器一型式(約三〇年)程度であり、二型式以上にわたることは少いという、泉拓良氏の研究成果<sup>①</sup>を前提とし、使用期間が重要な意味をもつ場合には別に検討することにした。

遺物による年代表記にあたっては、古墳時代中期以前は土器様式名で示し、以後については土器様式を西暦年代におきかえて表記することにする。なお五・六世紀は田辺昭三氏による須惠器編年<sup>②</sup>、七・八世紀は奈良国立文化財研究所による飛鳥・藤原宮・平城宮出土品の研究成果に依拠する<sup>③</sup>。九世紀以後は私自身の年代観<sup>④</sup>によって示す。なお出土遺物の量が少ない場合には年代を細かく限定することができなくなるが、すべて示す年代の一点で廃棄されたと考えるものである。

年代は以上の表記を基本とするが、同時に、弥生時代、古墳時代、古代、中世、近世の時代区分名を併せ用いる。ただ

表2 井戸各型式の時期別出土数(良好な遺物が出土した例)

型式 時期	AI	BI	BII	BIII	BV	BVI	BVII	BVIII	BIX	CI	CH	CHH	CHV	DI	DII	DW	時期区分	前	
	弥生時代	I 1																	
	II	1																	
	III	13																	
	IV	8																	
	V	34	4	6	2	(1)	(1)			(1)									
古墳時代	庄内	19		1			(1)												
	布留	26	5	2	1														
	中期	19	2																
	後期	8	1		1		(2)			(1)									
古代	前期	6	1	1		1	2	4		1						1			
		13	7	1	8	9	6	24	3	8	2								
	後期	5	2		2	4	1	7		2									
		8	1		6	6	1	3		4	3			1					
	後期	15			5	3		2		5	1					1			
中世	前期	38	4		18	10				34	24	13	11			13			
	後期	12			16	5	2		5	4	2	14				4			
	後期	1			10		1		1		1	5							
	後期	5						1			12		5						
近世	前期	25								2	12						*		
	後期	10				1			1		1	17		2			4		
近代		6			1	2				5	8		3				6		

し、この各時代をどのように定義し、そのはじまりを土器様式のどの段階にあてるかは難しい問題である。その論証は重要ではあるが、本稿の主題からは外れるため、ここでは誤解を避けることを主眼として、私の考えを示すのにとどめる。

私は弥生時代は山ノ寺・夜日I式土器<sup>⑤</sup>の時期、古墳時代は庄内式土器<sup>⑥</sup>の時期、古代は六世紀末(推古朝)、中世は一二世紀中頃(院政期の一点)、近世は一六世紀末(織豊政権期)がそのはじまりと考える。そして弥生時代は小林行雄氏による五様式区分<sup>⑦</sup>、古墳時代は三期区分に従い、古代前期は七〜九世紀、古代後期は一〇〜一二世紀初め、中世前期は一二世紀中頃〜一四世紀、中世後期は一五〜一六世紀中頃、近世前期は一六世紀末〜一八世紀初め、近世後期は一八世紀中頃〜一九世紀中頃の意味で用いる。

この年代表記の方針で井戸各型式の年代を検討することにする(表二)。なお表二に示したもののほかに、弥生中期(Ⅲ〜Ⅳ)のようにしか年代を表記できない

ものが多数あり、以下ではこれを加えて考察をおこなう。また井戸報告文献は稿末にまとめたので参照されたい。

(1) A類素掘り井戸

A I類素掘り井戸 奈良県橿原市藤原宮S E一四七五(弥生前期末I新)<sup>(一七)</sup>が最古の例であり、弥生時代85例、古墳時代79例、古代66例、中世176例、近世66例を数える。弥生時代のA I類素掘り井戸は前期(I)の段階から存在するが著しく数が増加するのは中期中頃(III)である。これ以後、古墳時代にかけては本型式の井戸が盛行する時期である。ただし、古代以後、A I類素掘り井戸がすたれるわけではない。素掘り井戸は常に井戸側が腐朽したり、抜き取られたりしたものである可能性を考慮しなければならないが、土質条件によっては特別の施設を設ける必要がないからである。

A II類まじまじ井戸

東京都府中市武蔵国府推定地掘田マンション建設地井戸址(古代後期)<sup>(一八)</sup>ほか若干の例があり、現代に至るまで用いられている。これは関東ローム層が厚く堆積する地域における特殊な例であろう。

(2) B類木組井戸

B I類丸太割抜き井戸 奈良県磯城郡田原本町唐古遺跡井戸(弥生中期初めII)<sup>(一九)</sup>が最も古い例であり、これは現在の知見でも最古のB類木組井戸である。弥生時代7例、古墳時代8例、古代14例、中世5例、近世1例を数える。

B II類縦板組無支持井戸

岡山県都窪郡上東遺跡P-3、P-4(弥生後期初めV古)<sup>(二〇)</sup>が最古の例であり、弥生時代6例、古墳時代3例、古代前期3例を数える。12例中9例までが弥生後期(V)〜古墳時代前期(庄内〜布留)に集中しているが、以後も少数は存在する。

B III類縦板組横棧どめ井戸

静岡市有東第二遺跡井戸(弥生後期V)<sup>(二一)</sup>が最古の例であり、井戸状遺構と報告される静岡県浜松市伊場遺跡Y G I(弥生後期V)<sup>(二二)</sup>も同様の構造をもっている。弥生時代2例、古墳時代2例、古代26例、中世54例、近代1例を数える。

B IV類縦板組隅柱横棧どめ井戸

隅柱をもつ最古の例は奈良県磯城郡田原本町唐古遺跡の葭を立て繞らせる井戸(弥生後

期<sup>〔元〕</sup>V)である。これを特例とすると、奈良県橿原市藤原宮SE一〇五(七世紀末<sup>〔元〕</sup>)が次に古い例であり、古代34例、中世39例、近世4例、近代2例を数える。

**B V 類** 横板組隅柱どめ井戸 この種のもので最古の例は岡山県真庭郡落合町下市瀬遺跡井戸Ⅱ(弥生後期<sup>〔元〕</sup>V)である。これは平面形が台形を呈し、両側から杭で固定する点で通例のものと異なる。これを特例とすると、奈良県橿原市藤原宮SE一五七(七世紀後半<sup>〔元〕</sup>)が最古の例であり、古代17例、中世3例を数える。

**B VI 類** 横板井籠組井戸 最古の例となる可能性があるものは、大阪府東大阪市瓜生堂遺跡B地区井戸8(B VI・e類)であり、掘り方から少量の庄内式土器が出土している<sup>〔三三〕</sup>。また千葉県木更津市菅生遺跡第二次調査井戸(B VI・b類)は鬼高期(古墳後期)の住居に伴なうとい<sup>〔三二〕</sup>、奈良県橿原市藤原宮SE一三八二(六世紀)も横板組の施設をもつ<sup>〔三七〕</sup>。ただしこの3

例は確実な例ではなく、これを保留するならば、最古の例は奈良県高市郡明日香村飛鳥板蓋宮伝承地大井戸SE六〇〇一(B VI・a類)である<sup>〔三三〕</sup>。この井戸は何度か造り替えがあり、七世紀末に廃棄されている。なお、この井戸について黒崎直氏は井戸側が最下段しか残っていないため、上部の構造は不明であるとしている<sup>⑨</sup>。しかしこれは内法一辺約一・三mの大型井戸であり、また四隅に各二ヶ所、上部の部材と結合する柄穴があることから、おそらくは井籠組の井戸であったと推測する。これら以外にB VI類横板井籠組井戸は、古代50例、中世前期2例を数え、出現は六世紀に遡る可能性がある。

**B VII 類** 縦板組柵どめ井戸 奈良市平城京右京五条四坊三坪SE〇二〇(八世紀中頃<sup>〔三七〕</sup>)が最古の例であるが、初現はこれよりやや遡ると推測したい。古代6例、中世7例、近世2例を数える。

**B VIII 類** 曲物積上げ井戸 奈良市平城京左京五条一坊SE一〇八一(八世紀中頃<sup>〔三六〕</sup>)が最古の例であり、古代27例、中世前期49例がある。

**B IX 類** 桶積上げ井戸 福岡県筑紫郡大宰府史跡SE七四五(一二世紀中頃<sup>〔三九〕</sup>)が最古の例であり、中世42例、近世7例、近代5例がある。

(3) C類石組井戸

CⅠ類石組円筒形井戸 井戸に石を使用した可能性がある最古の例は奈良県桜井市辻地区纏向遺跡土壙1（弥生後期末V新）<sup>〔圖〕</sup>であり、これに次ぐものは熊本県八代市興善寺町興善寺馬場遺跡井戸状遺構（六世紀中頃）<sup>〔圖〕</sup>である。ただしこれは石組の井戸としうる確実なものではない。これらを保留すると奈良県高市郡明日香村大官大寺第二次調査SE一一六（七世紀第Ⅲ四半期）<sup>〔表〕</sup>が最古の例である。古代6例、中世106例、近世38例、近代8例を数える。なお中世後期以後の資料は詳細な報告がなされることが少いため表二に示した数は多くはないが、中世後期と判るものだけで57例ある。

CⅡ類石組すり鉢形井戸 京都市左京区聖護院河原町京大病院構内A F 14区SE一四（十二世紀後半）<sup>〔表〕</sup>が最古の例であり、中世前期の11例がある。

CⅢ類石組袋状井戸 確実なものとしては和歌山県那賀郡岩出町根来寺の一六世紀の例<sup>〔表〕</sup>があり、中世後期17例を数える。

CⅣ類切石組円筒形井戸 京都市上京区相国寺門前町同志社中学校体育館予定地SE一一〇四<sup>〔表〕</sup>ほか、近世後期2例、近代3例がある。

(4) D類土器・土製品組井戸

DⅠ類瓦組井戸 福岡県筑紫郡大宰府史跡SX一五七三（一一世紀）<sup>〔三七〕</sup>は確実な井戸と認定されていないが本型式の最古の例であり、このほかに中世の7例がある。なお、井桁・水溜として瓦を使用する例は奈良県生駒郡斑鳩町法隆寺境内SE〇一（九世紀）<sup>〔圖〕</sup>ほか、時期の遡るものがある。

DⅡ類土器組井戸 佐賀県小城市三日月町土生遺跡井戸址<sup>〔圖六〕</sup>は、弥生中期（Ⅲ）の甕を用いているが、これはおそらくは時期が降るものであろう。これを保留すると、須恵器甕を用いた奈良県橿原市和田町和田麿寺SE〇七〇（七世紀）<sup>〔表〕</sup>が最古の例である。ただしこの型式の井戸が定着するのは中世前期に土師器羽釜を用いた井戸をつくるようになってからである。古代1例、中世前期20例がある。

DⅡ類土管組井戸 一四〇一五世紀と報告されている、奈良県磯城郡田原本町唐古鍵遺跡SE〇一<sup>(10)</sup>が最古の例であり、中世後期の大阪府堺市堺環濠都市にも存在する。本型式は報告例が少いため表二に示さなかったが、中世前期のDⅡ類土器組井戸と近世のDⅣ類埴組井戸とを結ぶ型式として重要である。

DⅣ類埴組(井戸互組)井戸 近世14例、近代6例がある。年代が判るものはすべて近世後期(一八世紀中頃以後)であるが、出現は近世前期頃と考える。

DⅤ類漆喰組井戸 近世後期(末) 4例、近代6例がある。

- ① 泉拓良編『京都大学埋蔵文化財調査報告』Ⅱ(一九八一年)
- ② 田辺昭三『須恵器大成』(一九八一年)
- ③ 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅱ(一九七九年)
- ④ 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』Ⅶ(一九七六年)
- ⑤ 山崎純男『弥生文化成立期における土器の編年的研究』(鏡山盛先生古稀記念『古文化論叢』一九八〇年)
- ⑥ 田中琢『布留式以前』(『考古学研究』第二二卷第二号、一九六五年)
- ⑦ 小林行雄・杉原莊介編『弥生式土器集成』本編1(一九六四年)
- ⑧ 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部技官西口寿生氏から御教示を戴いた。
- ⑨ 黒崎前掲書
- ⑩ 堺市教育委員会森村健一氏に御教示を戴いた。

#### 四 井戸の歴史

井戸の個々の型式の年代は前章で示したように長期にわたるものが多い。しかしこれを重ね合わせ、各時代で主に用いた型式の変化に着目すると、いくつかの段階を設定することができる。そしてこれを大きくまとめると、Ⅰ期…B類木組井戸を用いるが、AⅠ類素掘り井戸が主体をなす弥生・古墳時代、Ⅱ期…B類木組井戸が主体をなす古代、Ⅲ期…C類石組井戸が主体をなす中世、Ⅳ期…C類石組井戸に加えてD類土製品組井戸が普及する近世・近代、という四期を設定できる。またB類木組井戸、C類石組井戸、D類土器・土製品組井戸それぞれにも一定の変化がある。

これを技術的側面からみると素材と構造の変化はより堅牢な井戸、より深い井戸、より簡便に造りうる井戸への発達の歴史とみなすことができる。ただしこの技術革新は短期間に達成されたものではなく、また地域毎に異なる様相が現われる。井戸の歴史を知るためには、新しい型式の普及の過程と、普及にあたって主導的な役割りを果たした地域とに着目することが重要であると考ええる。このようにみるならば、Ⅰ期は弥生後期に、Ⅱ期は一〇世紀に、Ⅲ期は一四世紀に、Ⅳ期は一八世紀に重要な画期があると言える。以下ではまず日本の井戸のはじまりについて検討した後に、近代に至る各期の内容について示すことにする。

**井戸のはじまり**　現在、日本で井戸と報告されているものは、すべて弥生前期（Ⅰ）以後である。そして中国では漢代にはすでに、井桁・釣瓶を備えた土製品組の井戸が普及する段階に達して①、弥生時代の井戸と異なる点が多い。中国の井戸で弥生時代の井戸と関連する可能性があるのは、最古の稲作で知られる浙江省余姚県河姆渡村河姆渡遺跡の木組井戸（第二層、新石器時代中期）②であろう。この井戸は方形で覆屋をもち、弥生前・中期の井戸と少なからぬ相違点をもつ。

しかし江南の稲作文化が途中の地で変容しつつ日本へ伝わり、弥生時代がはじまるにあたって井戸を掘るといふ知識・技術が伝えられた可能性は十分に考慮すべきであろう。

他方、考えるべき点は弥生前期を中心にして掘削される袋状ピットについてである。この遺構の多くが食料貯蔵穴であることには異論がない。ただし、このうち不透水層に掘り込まれたものの一部には水を貯えるためのものがあったのではないかと考える③。そしてこのような袋状ピットは華北では新石器時代以後、長く用いられるが、日本でも縄文中期以後に多くの類例がある④。なお水溜めは地下水を利用する井戸とは区別するべきものであろう。ただし食料貯蔵穴を掘削する場合に重要な点は湿気の防止にある。したがってこの習慣を持つ人々は、地下を掘削すると水が湧くことがあることを知っていたはずであり、それを利用しなかったとは考えにくい。また少数ではあるが貯蔵穴が湧水層にまで達し、堅果類のあく抜きに用いたとされるものがある⑤。これは縄文時代に地下水が利用された例とみなせるであろう。

このように弥生時代の井戸が江南地方の系譜をひくか、縄文時代の系譜をひくかは、決め難いところがある。そして、  
 して述べるならば、いづれかに決するよりも弥生時代の多くの地域の井戸はその両者が基になり、素掘りの井戸から発  
 達したとする方が、その変化を理解しやすいと考える。ただし縄文時代に「井戸」が存在したとしても、それは井戸前史  
 として弥生時代以後と区別したい。その理由は数と技術革新の早さにおいて、縄文時代と弥生時代以後とは非常に大  
 きな差異があるからである。それは多くの新しい技術体系をもち稲作を基盤とする弥生社会が確立した段階で、はるかに  
 安定した定住生活を営むようになり、井戸が重要な位置を占めたからであると考える。

(1) 井戸Ⅰ期

弥生前・中期(Ⅰ～Ⅳ)をⅠa期、弥生後期(Ⅴ)～古墳時代をⅠb期とする。

Ⅰa期 36例の井戸があり、このうち確実にB類木組井戸であるのは、奈良県唐古遺跡のBⅠ類丸太刳抜き井戸1例  
 (約3%)である。他はすべてAⅠ類素掘り井戸と考えられるが、この時期に北九州地方では板組の井戸が用いられてい  
 た可能性もある。福岡県西区有田遺跡一号井戸(弥生中期後半～後期初めⅢ新Ⅳ)からは加工した木材が出土して、こ  
 れが井戸材である可能性が示されている。(三三三)また福岡市博多区板付遺跡第三号井戸(弥生中期中頃Ⅲ)は、そだ壁である可  
 能性がある。(三三三)そして畿内の丸太刳抜きの技術は、丸木舟を製作した縄文時代の木工技術の系譜をひく可能性があり、北九  
 州地方にこの時期、板組の井戸が存在するならば、江南地方ないし南朝鮮の系譜をひくと考える。

分布についてみると、36例中、北九州地方9例(25%)、畿内26例(約72%)、東海地方1例(約3%)であり、畿内の  
 中では畿内南部が26例中23例を占める。

Ⅰa期は、AⅠ類素掘り井戸が大多数を占めるが、井壁を保護する技術が用いられつつあった段階とすることができ  
 る。また分布の中心は北九州地方と畿内南部とにある。

Ⅰb期 Ⅰb期についてはまず弥生後期(Ⅴ)をみることにする。この時期の井戸の報告は46例あり、AⅠ類素掘り

井戸34例(約74%)、B類木組井戸12例(約26%)である。B類木組井戸の中では、BⅠ類丸太刳抜き井戸4例(約33%)、BⅡ類縦板組無支持井戸6例(50%)、BⅢ類縦板組横棧どめ井戸2例(約17%)である。

分布をみると、北九州地方3例(約7%)、瀬戸内東部(吉備)12例(約26%)、畿内23例(50%)、東海地方7例(15%)、北陸地方1例(約2%)である。また畿内では畿内南部が23例中19例を占める。B類木組井戸の分布をみると、B

Ⅰ類丸太刳抜き井戸は北陸の一例を除く<sup>(三六)</sup>と畿内に分布する。また畿内には大阪府和泉市池上遺跡M地区第三号井戸のように丸太刳抜き材の四周に縦板を用いる例はあるが、縦板組だけの井戸はまだ発見されていない。他方、瀬戸内東部にはBⅡ・a類縦板組無支持円形井戸が分布する。また東海地方にはBⅡ・b類縦板組無支持方形井戸とBⅢ類縦板組横棧どめ井戸という方形の井戸が分布し、円形の木組み井戸は一例だけである。<sup>(三七)</sup>

Ib期にはAⅠ類素掘り井戸が主体をなすが、B類木組井戸も広く用いられるようになる。分布は北九州地方で著しく減少し、瀬戸内東部と東海地方において増加するが、最大の中心地は畿内南部にある。またこの井戸の多い地域を単位として、B類木組井戸に一定の地域差を生じている。この様相はIa期とは大きく異り、画期として重視したい。

次に古墳時代と弥生後期(V)との差異をみると、布留式土器の時期に、畿内周辺部にBⅠ類丸太刳抜き井戸が拡まり、<sup>(三八)</sup>逆に畿内でも縦板組の井戸が採用された可能性がある。ただし現在、これを画期として呈示するにはまだ資料が不足している。また横板組や石組の井戸のように後の時期に盛行する型式の井戸が古墳時代に生まれた可能性もあるが、主要な型式は弥生後期(V)以来のものである(表二)。

古墳時代の井戸は92例を数え、AⅠ類素掘り井戸79例(約86%)、B類木組井戸13例(約14%)である。報告例が多い布留式土器の時期(五世紀を除く)に限っても、34例中8例(約24%)が木組B類井戸であり、弥生後期と同程度の比率である。これは、おそらく古墳時代の有力者の居館についての調査が端緒についたばかりであることを反映しているのである。しかし、古墳時代においても堅穴住居に住むような人々はAⅠ類素掘り井戸を使うことが多かったと推測する。

分布をみると北九州地方9例(約10%)、瀬戸内東部7例(約8%)、山陰地方1例(約1%)、畿内70例(約76%)、紀伊2例(約2%)、東海地方3例(約3%)である。また畿内の70例中、畿内南部が56例を占める。

古墳時代の井戸は今後の集落調査の進展によって時期区分が可能になるであろう。特に発掘例の少い五世紀後半から六世紀にかけて、畿内では木組B類井戸の比率が増し新しい型式も出現して井戸Ⅱ期の前段階をなした可能性が高いと考えられる。しかし現在の知見では主要なB類木組井戸の型式は、弥生後期(V)以来のものであり、六世紀においても相当数のAⅠ類素掘り井戸を使用している。また分布の中心が畿内南部にあることも弥生後期(V)以来、変化がない。そこでこれをⅠb期に含め、その細分は資料の増加を待って行なうことにする。

## (2) 井戸Ⅱ期

七〜九世紀をⅡa期、一〇〜一二世紀初めをⅡb期とする。

Ⅱa期 Ⅱa期の井戸は163例あり、比率はAⅠ類素掘り井戸28例(約17%)、B類木組井戸131例(約80%)、C類石組井戸3例(約2%)、DⅡ類土器組井戸1例(約1%)であり、B類木組井戸が多数を占める。少くとも畿内では、ほとんどの階層の人々が木組の井戸を用いえたことと推測できることが古墳時代と大きく異なる点である。ただし黒崎直氏が示すようにB類木組井戸の各型式と規模とは格式の差があった可能性が高いことを重視しなければならない。<sup>8)</sup>

B類木組井戸131例中の比率をみると、BⅠ類丸太刳抜き井戸12例(約9%)、BⅡ類縦板組無支持井戸3例(約2%)、BⅢ類縦板組横棧どめ井戸10例(約8%)、BⅣ類縦板組隅柱横棧どめ井戸23例(約18%)、BⅤ類横板組隅柱どめ井戸15例(約11%)、BⅥ類横板井籠組井戸46例(約35%)、BⅦ類縦板組柄どめ井戸5例(約4%)、BⅧ類曲物積上げ井戸17例(約13%)となる。B類木組井戸に多くの種類があることと、BⅥ類横板井籠組井戸の比率が高いことにこの時期の特色がある。

黒崎直氏は、平城宮において、内裏にはBⅠ類丸太刳抜き井戸があり、官衙にはBⅥ類横板井籠組井戸が多いことを明

らかにした。そして同氏は「大膳職・造酒司」の大型井戸を除くと、横板井籠組井戸の一边の内法には一・一mから一・六五mまでのほぼ六段階があること、また宮内の中枢から離れた地域や京内においては縦板組や曲物の井戸が多いことを示し、横板井籠組井戸が、宮内では役所の格式を、京内では、そこに住む人の官位を反映している可能性が高いことを明らかにしている。これに付け加えるならば、京内や京外の横板井籠組井戸のほとんどは一边の内法が一・二m以下であり、BVI・d・e・f 類の比率が高いと言える。そして丸太刳抜き井戸と縦板組の井戸が、弥生時代後期以後に広く普及した型式であるのに対して横板井籠組井戸がこの時期に著しく盛行することは特筆すべき点である。先に示したように横板組の井戸は古墳時代後期には出現している可能性があるが、平城宮官衙の井戸の直接の祖型は奈良県高市郡明日香村板蓋宮伝承地大井戸（BVI・a 類）に求めることができる。このことを含め井戸における古代的様相のはじまりを七世紀のどの段階に求めうるか、もしくはより遡るかどうかは重要な問題である。発掘例では七世紀のB類木組井戸は大多数が七世紀後半～末に属する。しかし七世紀前半は、それと異するというわけではなく、発掘例が少いことによる。私が七世紀以後をII a 期にあてるのは、飛鳥板蓋宮伝承地大井戸を七世紀中頃の横板井籠組井戸と認め、この完備した井戸の出現とB類木組井戸の普及は、それよりやや以前、推古朝頃にまでは遡るであろうと推測するからである。ただし飛鳥板蓋宮伝承地大井戸は最下段の井戸側しか残っていないため、本来は内裏の井戸に連なる大規模な丸太刳抜き井戸であった可能性も否定はできない。現在得られる確実な資料によるならば井戸II a 期の状況は七世紀末以後には確実にあって、それ以前にも他と隔絶した格式をもつ井戸が存在したらしいとするのが無難な所であり、これが遡るとするのは私の推測である。この問題の解決は六・七世紀の類例の増加を待たなければならぬ。

なお分布についてみると、163例中、北九州地方12例（約7%）、瀬戸内東部5例（約3%）、畿内134例（約82%）、紀伊1例（約1%）、東海地方7例（約4%）、関東地方2例（約1%）、東北地方2例（約1%）である。畿内では畿内南部が134例中121例を占める。そして藤原京と平城京と出土例が多いことは勿論であるが、これを除く畿内南部からも少な

らず出土し、分布の中心をなしている。また福島県西白河郡東村佐平林遺跡からBⅤ・d類横板井籠組井戸(九世紀前半)<sup>(三)</sup>秋田市寺内秋田城跡からBⅦ・a類縦板組大納どめ井戸(八世紀中頃)<sup>(四)</sup>が出土していることは、Ⅱa期の井戸の分布を考える上で重要な点である。

Ⅱb期 Ⅱb期がⅡa期と大きく異なる点は、BⅥ類横板井籠組井戸が著しく少くなることと、畿内南部が群をぬいて分布の中心をなすという弥生時代後期(V)以後、一貫して続いた状態に変化が生じることにある。

Ⅱb期の井戸87例中、AⅠ類素掘り井戸36例(約41%)、B類木組井戸44例(約51%)、C類石組井戸5例(約6%)D類土器・土製品組井戸2例(約2%)である。AⅠ類素掘り井戸が増加するのは東国を中心として素掘りの井戸を盛んに掘削するようになるからである。畿内に限ると、AⅠ類素掘り井戸の比率は約20%となる。

B類木組井戸44例中の比率は、BⅠ類丸太刳抜き井戸2例(約5%)、BⅢ類縦板組横棧どめ井戸16例(約36%)、BⅣ類縦板組隅柱横棧どめ井戸10例(約23%)、BⅤ類横板組隅柱どめ井戸2例(約5%)、BⅥ類横板井籠組井戸5例(約11%)、BⅦ類曲物積上げ井戸9例(約20%)である。この構成はⅡa期と変わるところはないが、BⅤ・b類横板井籠組目違い納どめ井戸は福岡県筑紫郡大宰府出土S E八七二が一〇世紀初めに降る可能性がある<sup>(五)</sup>はかばか類例が知られていない。平安京では京都市南区唐橋西寺町西寺跡から一辺の内法二・二〇mのBⅥ・b類横板井籠組井戸(九世紀中頃)が出土しているが、以後このような例はない。これは平安京の宮内は遺構の遺存度が悪いことによるのかもしれない。しかし井戸はもっとも残りやすい遺構であり、現在の知見ではⅡb期にこの種の大形井戸をほとんどつくらなくなったと考えうる。

分布をみると、87例中、北九州地方30例(約34%)、瀬戸内東部1例(約1%)、畿内42例(約48%)、東海地方6例(約7%)、北陸地方1例(約1%)、関東地方5例(約6%)、東北地方2例(約2%)である。畿内の中では42例中、畿内南部が20例となる。この時期の分布は、北九州地方をはじめとする畿外の地域で出土例が増加する一方、畿内南部と畿内北部の出土数がほぼ拮抗してくる点にⅡa期との大きな差異がある。

### (3) 井戸Ⅱ期

一二世紀中頃～一四世紀をⅢa期、一五世紀～一六世紀中頃をⅢb期とする。

Ⅲa期 先に中世をC類石組井戸の時期としたが、Ⅲa期について各型式の比率を計算すると、B類木組井戸の比率がC類石組井戸の比率より、はるかに多い数値となる地域が多い。これを重視するならば中世前期には古代後期の井戸の様相が色濃く残存したと言える。しかし、私はこの側面を認めつつⅢa期をⅡb期と区別してC類石組井戸の時代に含めたいのは以下の理由による。

井戸Ⅱ期については、井戸各型式の比率を全国一率に計算したが、Ⅲa期には井戸型式の地域差が顕在化するため、この方法は有効でなくなる。

Ⅲa期の井戸における地域区分は次のように考えられる。(一)B類木組井戸とC類石組井戸を併せ用いる畿内北部、(二)B類木組井戸とDⅡ類土器組井戸を併せ用いる畿内南部、(三)B類木組井戸を用いる西国、(四)B類木組井戸を用いるが多数のAⅠ類素掘り井戸を掘削する東国、である。これを簡単に表現すると、古代にはあまり用いなかった素材を採用した地域が畿内であり、その他の地域では、古代と同じ素材を用いつつ、新しい型式を生み出していったといえる。

畿内北部では52例の井戸がありそのうちC類石組井戸は30例(約58%)である。このC類石組井戸がどのように採用されたかを知られる例として京都市左京区聖護院河原町京大病院構内A F 14区白河北殿北辺遺跡がある。本遺跡から出土した井戸を時期別に整理した泉拓良氏は各時期において二つの井戸を組み合わせて用い、常に地形の高い位置にB類木組井戸、低い位置にC類石組井戸を設けていることを明らかにした。このことから当時の人々は、依然としてB類木組井戸を重視していたことが判る。そして身分の高い人はB類木組井戸を用い、身分の低い人がC類石組井戸を用いたか、もしくは飲用の清浄な水をB類木組井戸に求め、その他の生活用水をC類石組井戸から得たか、いずれかであると推測したい。

他の地域をみると、北九州地方は、64例中、AⅠ類素掘り井戸6例(約9%)、B類木組井戸50例(約78%)、C類石組

井戸8例(約13%)である。B類木組井戸50例の中では、BⅢ類縦板組横棧どめ井戸4例(8%)、BⅣ類縦板組隅柱横棧どめ井戸5例(10%)、BⅤ類桶積上げ井戸41例(82%)となる。本地域はBⅤ類桶積上げ井戸が多いことに特色がある。

瀬戸内東部は37例中、AⅠ類素掘り井戸2例(約5%)、B類木組井戸32例(約86%)、C類石組井戸3例(約8%)である。B類木組井戸の中では、BⅠ類丸太割抜き井戸1例(約3%)、BⅢ類縦板組横棧どめ井戸15例(約47%)、BⅣ類縦板組隅柱横棧どめ井戸6例(約19%)、BⅦ・a類縦板組太柄どめ井戸5例(約16%)、BⅧ類曲物積上げ井戸5例(約16%)となる。BⅢ類縦板組横棧どめ井戸の比率が高く、横棧を支柱で補強したBⅢ・2類井戸が現われる。

畿内南部では、82例中、AⅠ類素掘り井戸18例(約22%)、B類木組井戸33例(約40%)、C類石組井戸11例(約13%)、DⅡ類土器組井戸20例(約24%)である。本地域ではB類木組井戸とDⅡ類土器組井戸とが約65%を占める。なお、B類木組井戸33例中ではBⅧ類曲物積上げ井戸が28例を占めるがこのうちのいくつかは縦板組の井戸の水溜である可能性がある。またDⅡ類土器組井戸の大多数は土師器羽釜を積み上げるものである。

東国については各地域別に数値を示すには資料が不足している。共通する傾向はAⅠ類素掘り井戸が主体をなすことであり、BⅢ類縦板組横棧どめ井戸とBⅣ類縦板組隅柱横棧どめ井戸とが広く分布し横板組の井戸も少数ある。

以上のようにⅢa期にC類石組井戸を本格的に採用するのは畿内北部という限られた地域である。またこの地域にあっても重要な井戸はB類木組井戸であった可能性が高い。ただし井戸における地域色の顕在化そのものが、以前の段階とは大きく異なる点である。そしてこの時期の終りに生じる重要な画期は、各地域の中でもC類石組井戸が普及する畿内北部において生じた動きとの関連で理解できるものである。このことからⅢa期にはC類石組井戸が普及しつつあることを重視した。

Ⅲb期 Ⅲb期はC類石組井戸の時代である。その第一点は、畿内北部で大多数の井戸が石組になることであり、第二点はC類石組井戸が主体をなす地域が拡大する点にある。なお中世後期以後は、出土遺物を詳細に報告する例が少くな

るため、Ⅲb期以後は数の比率を呈示することをやめ、看取できる傾向を示すことにする。

畿内北部においては一四世紀の段階ですでにC類石組井戸が増加する傾向があるが、Ⅲb期にはごく少数の素掘りAⅠ類井戸を除くと、大多数がCⅠ類石組円筒形井戸となる。この段階ではおそらく畿内北部の人々のほとんどは、C類石組井戸の水を平気で飲み用いるようになったと考える。そしてこの地域の井戸における古代の様相の払拭はこの段階に求めることができる。

またⅢb期にC類石組井戸を多く用いるようになる遺跡として、山口県山口市大字大殿大内氏館・同防府市下右田遺跡<sup>〔三三〕</sup>、福井県福井市一乗谷朝倉氏館<sup>〔三六〕</sup>、和歌山県那賀郡岩出町根来寺<sup>〔三九〕</sup>ほかをあげることができる。この畿内以外でC類石組井戸を採用した地域では、CⅠ類石組円筒形井戸のほかに、CⅢ類石組袋状井戸を用いることを特色とする。おそらくⅢb期には西日本一帯でC類石組井戸が増加すると考えうる。

なおこの現象は、この時期の最も重要な動きであるが、すべての地域をこの点のみで解しうるわけではない。その第一は畿内南部とりわけ環濠都市界で、DⅡ類土器組井戸がDⅢ類土管組井戸になるという技術革新がなされたことであり、第二はC類石組井戸の普及は東国には及ばなかったらしいことである<sup>〔四二〕</sup>。この二点は近世の動向を考える上で重要である。

#### (4) 井戸Ⅳ期

一六世紀末～一八世紀初めをⅤa期、一八世紀中頃以後をⅤb期とする。

この時期の実態が比較的、明らかであるのは近世京都市街についてである。その知見によるとⅤa期は少数のD類土製品組井戸が現われるが、Ⅲb期と、大きな変化がなくCⅠ類石組円筒形井戸が主体をなす。そしてⅤb期に至って、DⅣ類埴組(井戸瓦組)井戸、DⅤ類漆喰組井戸、CⅣ類切石組円筒形井戸という多くの型式の井戸が普及していく。

そして重要な点はCⅣ類切石組円筒形井戸を除くD類土製品組井戸は近世に京都で発明されたものではなく、中世後期の畿内南部に系譜をたどれる点である。現在、畿内南部の近世については不明な点が多いが、D類土製品組井戸はおそら

く近世の畿内南部で発達し、Ⅳb期になってC類石組井戸の本場である京都にまで普及したと解したい。すなわちⅣ期における新しい動きの源は畿内南部に求めることができる。また現在の資料では時期を細かく限定できないが、Ⅳ期の段階には畿内の井戸が東国に拡まった可能性が高いことも重要である。

他方、近代になると、次第にコンクリートの井戸が主流をなすようになる。これは一面から見ると外来の技術の摂取により、伝統的な技術がすたれたとも考えうる。しかしⅣb期の日本において、DⅣ類埴組井戸やDⅤ類漆喰組井戸のように可塑性をもつ素材を使用する井戸が普及する段階に達していたからこそ、コンクリートという新しい素材が容易に広まりえたと考えたい。この意味で近代の井戸は近世以後の動きの帰結という側面がある。

- ① 北京市文物管理處寫作小組「北京地区的古瓦井」(『文物』一九七二年、第二期) ほか
- ② 濱田耕作『支那古明器泥像図鑑』第六輯(一九三三年) ほか
- ③ 浙江省文物管理委員会・浙江省博物館「河姆渡遺址第一期発掘報告」(『考古学報』一九七八年、第一期)
- ④ 中国科学院考古研究所・陕西省西安半坡博物館編『西安半坡』(一九六三年) ほか
- ⑤ 堀越正行ほか「袋状ピットの様相と地域性」(日本考古学協会昭和五十六年度大会シンポジウム「北関東を中心とする縄文中期の諸問題 資料」一九八一年)
- ⑥ 南方前池遺跡調査団「岡山県山陽町南方前池遺跡」(私たちの考古学』第七号、一九五六年) ほか
- ⑦ 渡辺誠『縄文時代の植物食』(一九七五年)
- ⑧ 中南河内・大和・和泉を畿内南部、山城・摂津・北河内を畿内北部と呼ぶ。なお時期によっては、大和北部は畿内北部に含めた方がよい。
- ⑨ 黒崎直前掲書
- ⑩ この例も九世紀に遡る可能性が高い。
- ⑪ 京都でもD類土製品組井戸は近世前期に少数であるが現われることを小森俊寛氏から御教示戴いた。

## 結 語

以上で井戸のはじまりから近代に至る、型式と地域色変化の流れを検討した。その結果、日本における井戸の定着は稲作を基盤とする弥生社会の確立と密接な関係があり、社会の成長とともに、多様な井戸が生まれたことを明らかにした。

それは技術の発達という側面をもちつつ社会の動向と密接な関係をもっていたと推測できる。

井戸の発達を大きくまとめると、B類木組井戸を用いるがA類素掘り井戸が主体をなした弥生・古墳時代、B類木組井戸が主体をなした古代、C類石組井戸が主体をなした中世、C類石組井戸に加えてD類土製品組井戸が普及していく近世・近代の四期に大別することができる。そして、その普及の過程と地域性にと着目すると、各期の中にも重要な画期を設定することができる。この意味でB類木組井戸が最も発達した古代前期（七～九世紀）の様相はB類木組井戸の普及が本格化する弥生後期（V）以後の帰結であり、C類石組井戸が卓越する中世後期（一五世紀～一六世紀中頃）の様相はB類木組井戸の衰退がはじまる古代後期以後（一〇世紀以後）の帰結である。またコンクリート製の井戸が主流となる近代はD類土製品組井戸が普及していく近世の帰結としてよいであろう。そして弥生後期以後の動きについては畿内南部、古代後期以後の動きについては畿内北部、近世以後の動きについては、ふたたび畿内南部が重要な役割を果たしたと考えるのである。

以上で述べた点は、井戸という一つの種類の遺構についてのものであり、この結果を他の事柄に敷衍することには慎重でなくてはならない。しかし私は他の種類の遺構・遺物のうち、住居・食器をはじめとする、かなりのものについて、これと同様の時期に重要な変化があるという見通しをもっている。それは生活に欠くことのできない水を得るといふ行為が社会に深くねざし、その変化とともに工夫が積み重ねられたからであると考ええる。

謝辞 本稿をまとめるにあたって、以下の方々から多くの有益な御教示を戴いた。記して厚く御礼申し上げます。中尾芳治、近藤喬

一、都出比呂志、岡内三真、西山良平、西口寿生、小林健一、深澤芳樹、高倉洋彰、山崎純男、鈴木重治、橋本久和、兼康保明、坪之内徹、森村健一、永田信一、堀内明博、小森俊寛。また小野山節先生には特に多くの御指導と懇切な御助言とを戴いた。そして私が井戸に着目する契機となった京都大学構内遺跡の調査において、小林行雄、樋口隆康、中村徹也の諸先生のお世話になり、また泉拓良、

岡田保良氏が常によき学兄であったことを明記して、感謝の意を表します。

(京都大学文学部助手)

### 井戸報告文獻

- (一) 秋田県教育委員会・払田柵跡調査事務所『払田柵跡』払田柵跡調査事務所年報一九七九(一九八〇年)
- (二) 秋田市教育委員会『秋田城跡』昭和五一年度秋田城跡発掘調査概報(一九七七年)
- (三) 同『下夕野遺跡』(一九七九年)
- (四) 同『後城遺跡発掘調査報告書』(一九八一年)
- (五) 秋田市教育委員会・秋田城跡発掘調査事務所『秋田城跡』昭和五三年度秋田城跡発掘調査概報(一九七九年)
- (六) 同『秋田城跡』昭和五四年度秋田城跡発掘調査概報(一九八〇年)
- (七) 仙台市教育委員会『北屋敷遺跡』仙台市文化財調査報告書第一七集(一九七九年)
- (八) 同『今泉城跡』仙台市文化財調査報告書第二四集(一九八〇年)
- (九) 同『鴻ノ巣遺跡』仙台市文化財調査報告書第三二集(一九八一年)
- (一〇) 宮城県教育委員会『東北新幹線関係遺跡調査報告書』I、宮城県文化財調査報告書第三五集(一九七四年)
- (一一) 同『宮城県文化財発掘調査略報』宮城県文化財調査報告書第四〇集(一九七五年)
- (一二) 同『宮城県文化財発掘調査略報』宮城県文化財調査報告書第四一集(一九七七年)
- (一三) 同『宮城県文化財発掘調査略報』宮城県文化財調査報告書第五三集(一九七八年)
- (一四) 同『宮城県文化財発掘調査略報』宮城県文化財調査報告書第五七集(一九七九年)
- (一五) 同・宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡』宮城県多賀城跡調査研究所年報一九七二(一九七二年)
- (一六) 同『多賀城跡』宮城県多賀城跡調査研究所年報一九七三(一九七四年)
- (一七) 同『多賀城跡』宮城県多賀城跡調査研究所年報一九七四(一九七五年)
- (一八) 同『多賀城跡』宮城県多賀城跡調査研究所年報一九七六(一九七七年)
- (一九) 同『多賀城跡』宮城県多賀城跡調査研究所年報一九七七(一九七八年)
- (二〇) 同『多賀城跡』宮城県多賀城跡調査研究所年報一九七八(一九七九年)
- (二一) 同『伊治城跡』II、多賀城関連遺跡発掘調査報告書第四冊(一九七九年)
- (二二) 同『伊治城跡』III、多賀城関連遺跡発掘調査報告書第五冊(一九八〇年)
- (二三) 福島県教育委員会『母畑地区遺跡発掘調査報告』II、福島県文化財調査報告書第七四集(一九七九年)

- (四) 尾崎紀左雄「群馬県碓氷郡水沼遺跡」(『日本考古学年報』昭和二年度、一九五一年)
- (五) 高崎市教育委員会『矢島遺跡・御布呂遺跡』高崎市文化財調査報告書第七集(一九七九年)
- (六) 同『小八木遺跡調査報告書』一(一九七九年)
- (七) 同『寺ノ内遺跡』高崎市文化財調査報告書第一三集(一九七九年)
- (八) 大和久震平『小倉遺跡発掘調査報告書』(一九七四年)
- (九) 栃木県教育委員会『佐野市工業団地内遺跡発掘調査報告書』栃木県埋蔵文化財報告書第三冊(一九七〇年)
- (一〇) 益子町教育委員会『星の宮ケカチ遺跡』(一九七八年)
- (一一) 大場磐雄・乙益重隆編『上総菅生遺跡』(一九八〇年)
- (一二) 鴻巣市遺跡調査会『生田塚遺跡』鴻巣市遺跡調査会報告書第二集(一九八一年)
- (一三) 埼玉県遺跡調査会『水深』埼玉県遺跡調査会報告第一三集(一九七二年)
- (一四) 同『山田遺跡・相模場遺跡発掘調査報告』埼玉県遺跡調査会報告第一八集(一九七三年)
- (一五) 埼玉県埋蔵文化財事業団『埋蔵文化財発掘調査報告』Ⅺ、埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第一集(一九八一年)
- (一六) 埼玉県立歴史資料館考古資料室『六反田遺跡』(一九八一年)
- (一七) 深谷市割山遺跡調査会『割山遺跡』深谷市埋蔵文化財発掘調査報告(一九八一年)
- (一八) 東京都清瀬市下宿内山遺跡調査会・団『下宿内山』遺跡発掘調査概報No.3(一九七九年)
- (一九) 同『下宿内山』遺跡発掘調査概報No.4(一九八〇年)
- (二〇) 清瀬町東京川越遺跡調査会『清戸下宿遺跡調査報告』(一九六九年)
- (二一) 年)
- (二二) 府中市育委員会・府中市遺跡調査会『武蔵国府の調査』I(一九七七年)
- (二三) 同『武蔵国府の調査』II(一九七七年)
- (二四) 同『武蔵国府の調査』III(一九七八年)
- (二五) 武蔵国分寺遺跡調査会・国分寺市教育委員会『武蔵国分寺遺跡発掘調査概報』V(一九八一年)
- (二六) 宇田川正宏『鎌倉駅西口前の中世井戸址と遺物』(『鎌倉考古』No.6、一九八一年)
- (二七) 鎌倉考古学研究所『掘り出された鎌倉』(一九八一年)
- (二八) 河野真知郎『雪ノ下南御門遺跡の第Ⅱ期調査』(『鎌倉考古』No.4、一九八〇年)
- (二九) 湘南砂丘遺跡研究会『四ノ宮下ノ郷調査概報』(一九八〇年)
- (三〇) 大場磐雄『古代農村の復原』(一九四八年)
- (三一) 国学院大学伊場遺跡調査隊編『伊場遺跡』(一九五三年)
- (三二) 後藤守一『静岡市有東第二遺跡』(『日本考古学年報』一、昭和三年度、一九五一年)
- (三三) 沼津市教育委員会・沼津考古学研究所『目黒身』(一九七〇年)
- (三四) 浜松市教育委員会編『伊場遺跡第六・七次発掘調査概報』(一九七五年)
- (三五) 同『伊場遺跡遺構編』伊場遺跡発掘調査報告書第二冊(一九七七年)
- (三六) 藤枝市教育委員会ほか『国道一号藤枝バイパス(藤枝地区)埋蔵文化財発掘調査概報』昭和五年度(一九七八年)
- (三七) 同『国道一号藤枝バイパス(藤枝地区)埋蔵文化財発掘調査概報』昭和五年度(一九七九年)
- (三八) 同『秋合遺跡発掘調査報告書』(一九八〇年)



年)

〔九七〕 『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』Ⅰ、一九七四・七

五年度(一九七九年)

〔九八〕 『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』Ⅱ、一九七六年度

(一九八一年)

〔九七〕 京都市埋蔵文化財研究所『伏見城跡発掘調査概報』(一九七七年)

〔九八〕 同 『平安京跡発掘調査概報』京都市埋蔵文化財研究所概報集一

九七八・Ⅱ(一九七八年)

〔九九〕 同 『常盤仲ノ町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所

調査報告Ⅲ(一九七八年)

〔一〇〇〕 京都市埋蔵文化財調査センター・京都市埋蔵文化財研究所『大鼓

遺跡発掘調査概要』(一九八一年)

〔一〇一〕 同 『鳥羽離宮跡調査概要』(一九八一年)

〔一〇二〕 京都市農学部構内遺跡調査会・理学部附属瀬戸臨海実験所構内

遺跡調査会『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和五一年度(一九

七七年)

〔一〇三〕 京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年

報』昭和五二年度(一九七八年)

〔一〇四〕 同 『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和五三年度(一九七九

年)

〔一〇五〕 同 『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和五四年度(一九八〇

年)

〔一〇六〕 同 『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和五五年度(一九八一

年)

〔一〇七〕 同 『京都大学埋蔵文化財調査報告』Ⅱ(一九八一年)

〔一〇八〕 京都市教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』一九七四(一九七

四年)

〔一一一〕 同 『埋蔵文化財発掘調査概報』一九七七(一九七七年)

〔一一二〕 同 『埋蔵文化財発掘調査概報』一九七八(一九七八年)

〔一一三〕 同 『埋蔵文化財発掘調査概報』一九七九(一九七九年)

〔一一四〕 同 『埋蔵文化財発掘調査概報』一九八〇(一九八〇年)

〔一一五〕 古代学協会『平安京高倉宮・曇華院跡の発掘調査』(一九七九年)

〔一一六〕 同 『平安京左京五条三坊十五町』平安京跡研究調査報告第五輯

(一九八一年)

〔一一七〕 杉山信三『西寺食堂跡』(日本国有鉄道『東海道新幹線工事に伴

う埋蔵文化財調査報告書』一九六五年)

〔一一八〕 同志社大学校地学術調査委員会『今出川校地電話配線替に伴う発

掘調査概要・岩倉校地体育講義棟建設予定地発掘調査概要・同志社

香里中等学校礼拝堂建設に伴う立合調査概要』同志社大学校地学

術調査会調査資料№6(一九七六年)

〔一一九〕 同 『同志社中学校体育館建設予定地発掘調査概要』同志社大学

校地学術調査委員会調査資料№10(一九七七年)

〔一二〇〕 同 『同志社キャンパス内出土の遺構と遺物』同志社校地内埋蔵

文化財調査報告資料編Ⅰ(一九七七年)

〔一二一〕 同ほか 『常盤井殿町遺跡発掘調査概報』同志社大学校地学術調

査委員会調査資料№12(一九七八年)

〔一二二〕 同 『地下鉄烏丸線今出川駅地点の発掘調査』(一九八一年)

〔一二三〕 鳥羽離宮跡調査研究所『史跡西寺跡』(一九七七年)

〔一二四〕 同 『日本専売公社工場用地内埋蔵文化財発掘調査概報』(一九

七七年)

〔一二五〕 長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書』第五冊(一九

八〇年)

〔一二六〕 平安京調査会『平安京跡発掘調査報告』左京四条一坊(一九七五

年)

- 〔三七〕 同 『平安京跡発掘調査報告』左京八条四坊(一九七七年)
- 〔三八〕 平安博物館『東洞院大路・曇華院跡』(一九七七年)
- 〔三九〕 向日市教育委員会『向日市埋蔵文化財調査報告書』第六集(一九八〇年)
- 〔四〇〕 同 『向日市埋蔵文化財調査報告書』第七集(一九八一年)
- 〔四一〕 龍谷大学考古学研究会『聚楽第跡』(一九七七年)
- 〔四二〕 波辺誠『長岡京跡の曲物井戸』『古代文化』第三〇巻第八号、一九七八年)
- 〔四三〕 網干善教『橿原市四条新町奈良県立医科大学内上代井戸』『奈良県文化財調査報告』第二集、一九五八年)
- 〔四四〕 小笠原好彦『平城京左京二条五坊北郊の調査』(一九七〇年)
- 〔四五〕 河原純之『平城宮跡最近出土の遺物』『考古学雑誌』第五一卷第二号、一九六五年)
- 〔四六〕 末永雅雄『磯城郡敷島村粟殿出土板井』『奈良県史蹟名勝天然記念物調査会抄報』第二輯、一九四一年)
- 〔四七〕 同 『北葛城郡磐園村磯野出土板井』『奈良県史蹟名勝天然記念物調査会抄報』第二輯、一九四一年)
- 〔四八〕 末永雅雄『榎原』(一九六一年)
- 〔四九〕 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古跡生式遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究报告第一六冊(一九四三年)
- 〔五〇〕 田中一郎『奈良高校校庭発見の角井戸調査概報』『考古学雑誌』第四一卷第一号一九五五年)
- 〔五一〕 奈良県教育委員会『奈良県文化財調査報告』第二集(一九五八年)
- 〔五二〕 同 『藤原宮』奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第二五冊(一九六九年)
- 〔五三〕 同 『飛鳥京跡』一、奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第二六冊(一九七一年)
- 〔五四〕 奈良県立橿原考古学研究所『大安寺』五〇年度発掘調査概報(一九七六)
- 〔五五〕 同編『纏向』(一九七六年)
- 〔五六〕 同 『奈良県遺跡調査概報』一九七六年度(一九七七年)
- 〔五七〕 同 『奈良県遺跡調査概報』一九七七年度(一九七八年)
- 〔五八〕 同編『大福遺跡』奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第三六冊(一九七八年)
- 〔五九〕 同 『奈良県遺跡調査概報』一九七八年度(一九七九年)
- 〔六〇〕 同編『唐古・鍵遺跡』第四・五次発掘調査概報(一九七九年)
- 〔六一〕 同編『唐古・鍵遺跡』第六・七・八・九次発掘調査概報(一九七九年)
- 〔六二〕 同編『飛鳥京跡』二、奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第四〇冊(一九八〇年)
- 〔六三〕 同編『発志院遺跡』奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第四一冊(一九八〇年)
- 〔六四〕 同編『唐古・鍵遺跡』第二〇・二一次発掘調査概報(一九八一年)
- 〔六五〕 同 『奈良県遺跡調査概報』一九七九年度(一九八一年)
- 〔六六〕 同付属博物館『大和を掘る』(一九八一年)
- 〔六七〕 奈良国立文化財研究所『川原寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第九冊(一九六〇年)
- 〔六八〕 同 『平城宮跡第一次・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第一〇冊(一九六一年)
- 〔六九〕 同 『奈良国立文化財研究所年報』(一九六一年)
- 〔七〇〕 同 『平城宮発掘調査報告』Ⅱ、奈良国立文化財研究所学報第一五冊(一九六二年)
- 〔七一〕 同 『平城宮第三二(南)・二五・二六次発掘調査概報』(一九

六五年)

〔二六〕 同 『奈良国立文化財研究所年報』(一九六五年)

〔二七〕 同 『平城宮第三七・三九・四〇・四一次発掘調査概報』(一九六七年)

六七年)

〔二八〕 同 『昭和四八年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』(一九七四年)

四年)

〔二九〕 同編 『平城京朱雀大路発掘調査報告』(一九七四年)

〔三〇〕 同 『平城京左京三条二坊』奈良国立文化財研究所学報第二三冊(一九七五年)

〔三一〕 同 『奈良国立文化財研究所年報』(一九七四年)

〔三二〕 同 『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』四(一九七四年)

〔三三〕 同 『平城宮発掘調査報告』Ⅴ、奈良国立文化財研究所学報第二三冊(一九七五年)

〔三四〕 同 『昭和四九年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』(一九七五年)

〔三五〕 同 『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』五(一九七五年)

〔三六〕 同 『平城京左京三条二坊六坪発掘調査概報』(一九七六年)

〔三七〕 同 『平城京左京八条三坊発掘調査概報』東市周辺東北地域の調査(一九七六年)

〔三八〕 同 『平城宮発掘調査報告』Ⅵ、奈良国立文化財研究所学報第二六冊(一九七六年)

〔三九〕 同 『昭和五〇年度平城京跡発掘調査部発掘調査概報』(一九七六年)

〔四〇〕 同 『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』六(一九七六年)

〔四一〕 同 『平城京右京五条四坊三坪発掘調査概報』(一九七七年)

〔四二〕 同 『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』七(一九七七年)

〔四三〕 同 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅱ、奈良国立文化財研究所学報第三二冊(一九七八年)

〔四四〕 同 『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』八(一九七八年)

〔四五〕 同 『昭和五二年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』(一九七八年)

〔四六〕 同 『平城宮発掘調査報告』Ⅶ、奈良国立文化財研究所学報第三四冊(一九七八年)

〔四七〕 同 『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』九(一九七九年)

〔四八〕 同 『昭和五四年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』(一九八〇年)

〔四九〕 同 『平城宮北地域発掘調査報告書』(一九八一年)

〔五〇〕 同 『平城京九条大路』(一九八一年)

〔五一〕 同 『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』一一(一九八一年)

〔五二〕 同 『歴史室「平城宮跡発掘の成果と問題点」『考古学雑誌』第四七巻第一号、一九六一年)

報第三二冊(一九七八年)

〔五三〕 同 『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』八(一九七八年)

〔五四〕 同 『昭和五二年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』(一九七八年)

八年)

〔五五〕 同 『平城宮発掘調査報告』Ⅷ、奈良国立文化財研究所学報第三四冊(一九七八年)

〔五六〕 同 『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』九(一九七九年)

〔五七〕 同 『昭和五四年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』(一九八〇年)

〔五八〕 同 『平城京左京三条四坊七坪発掘調査概報』(一九八〇年)

〔五九〕 同 『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』一〇(一九八〇年)

〔六〇〕 同 『平城宮北地域発掘調査報告書』(一九八一年)

〔六一〕 同 『平城京九条大路』(一九八一年)

〔六二〕 同 『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』一一(一九八一年)

〔六三〕 同 『歴史室「平城宮跡発掘の成果と問題点」『考古学雑誌』第四七巻第一号、一九六一年)

〔六四〕 同 『建造物研究室「阿伽井及阿伽井屋について」『奈良国立文化財研究所年報』一九六五年)

〔六五〕 同 『奈良市教育委員会『多聞鹿城跡発掘調査概要報告』(一九七九年)

〔六六〕 同 『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和四四年度(一九八〇年)

〔六七〕 同 『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和五五年度(一九八一年)

〔六八〕 同 『記念物調査抄報』第五輯、一九五五年)

〔六九〕 同 『念物調査抄報』第五輯、一九五五年)

〔七〇〕 同 『念物調査抄報』第五輯、一九五五年)

〔七一〕 同 『念物調査抄報』第五輯、一九五五年)

〔七二〕 同 『念物調査抄報』第五輯、一九五五年)

〔七三〕 同 『念物調査抄報』第五輯、一九五五年)

〔七四〕 同 『念物調査抄報』第五輯、一九五五年)

〔七五〕 同 『念物調査抄報』第五輯、一九五五年)

〔七六〕 同 『念物調査抄報』第五輯、一九五五年)

〔七七〕 同 『念物調査抄報』第五輯、一九五五年)

〔七八〕 同 『念物調査抄報』第五輯、一九五五年)

〔七九〕 同 『念物調査抄報』第五輯、一九五五年)

〔八〇〕 同 『念物調査抄報』第五輯、一九五五年)

- 〔六〕 泉大津市教育委員会『豊中遺跡発掘調査概要』Ⅱ(一九七八年)
- 〔九〕 同『豊中遺跡発掘調査概要』Ⅲ、泉大津市文化財調査概要四(一九七九年)
- 〔一〇〇〕 (中央南幹線内西岩田) 瓜生堂遺跡調査会『西岩田遺跡』(一九七一年)
- 〔一〇一〕 瓜生堂遺跡調査会『瓜生堂遺跡』Ⅲ(一九八〇年)
- 〔一〇二〕 同『恩智遺跡』Ⅰ(一九八〇年)
- 〔一〇三〕 同『恩智遺跡』Ⅱ(一九八一年)
- 〔一〇四〕 大阪府教育委員会、難波宮址顕彰会『平野遺跡群緊急調査報告書』(一九七九年)
- 〔一〇五〕 大阪市文化財協会『瓜破北遺跡』(一九八〇年)
- 〔一〇六〕 同『難波宮址の研究』第七(一九八一年)
- 〔一〇七〕 同『難波宮跡研究調査年報』一九七五～一九七九、六(一九八一年)
- 〔一〇八〕 大阪府教育委員会『四条畷町、正法寺跡発掘調査概要』(一九七〇年)
- 〔一〇九〕 同『嶋上郡衙跡発掘調査概要』大阪府文化財調査概要一九七〇(一九七一年)
- 〔一一〇〕 同『嶋上郡衙跡発掘調査概要』Ⅱ、大阪府文化財調査概要一九七〇(一九七二年)
- 〔一一一〕 同『嶋上郡衙跡発掘調査概要』Ⅲ、大阪府文化財調査概要一九七二(一九七三年)
- 〔一二〕 同『外環状線内遺跡発掘調査概要』Ⅰ、大阪府文化財調査概要一九七二(一九七三年)
- 〔一三〕 同『金岡遺跡発掘調査概要』大阪府文化財調査概要一九七三(一九七四年)
- 〔一四〕 同『古池北遺跡調査概要』(一九七四年)
- 〔一五〕 同『大園遺跡発掘調査概要』Ⅱ、大阪府文化財調査概要一九七四(一九七五年)
- 〔一六〕 同『国府遺跡発掘調査概要』Ⅹ(一九八〇年)
- 〔一七〕 同『はさみ山遺跡発掘調査概要』(一九八〇年)
- 〔一八〕 大阪文化財センター『長原』(一九七八年)
- 〔一九〕 同『亀井・城山』(一九八〇年)
- 〔二〇〕 同『瓜生堂』(一九八〇年)
- 〔二一〕 大谷女子大学資料館『中野』Ⅰ、大谷女子大学資料館報告第二冊(一九七九年)
- 〔二二〕 堺市教育委員会『堺市文化財調査報告書』第六集(一九八〇年)
- 〔二三〕 同『堺市文化財調査報告書』第七集(一九八一年)
- 〔二四〕 同『向井神社跡遺跡四ツ池遺跡』(一九八一年)
- 〔二五〕 四条畷市文化財調査会『岡山南遺跡発掘調査概要』Ⅰ、四条畷市埋蔵文化財包蔵地調査概報二(一九七六年)
- 〔二六〕 第二阪和国道内遺跡調査会『池上・四ツ池』(一九七〇年)
- 〔二七〕 同『第二阪和国道内遺跡発掘調査報告書』三(一九七一年)
- 〔二八〕 高槻市教育委員会『安満遺跡発掘調査報告書』高槻市文化財調査報告書第五冊(一九七四年)
- 〔二九〕 同『安満遺跡発掘調査報告書』高槻市文化財調査報告書第一〇冊(一九七七年)
- 〔三〇〕 同『嶋上郡衙跡発掘調査概要』二(一九七八年)
- 〔三一〕 同『嶋上郡衙跡発掘調査概要』四(一九八〇年)
- 〔三二〕 同『上牧遺跡発掘調査報告書』高槻市文化財調査報告書第一三冊(一九八〇年)
- 〔三三〕 同『嶋上郡衙跡発掘調査概要』五(一九八一年)
- 〔三四〕 豊中・古池遺跡調査会『豊中・古池遺跡発掘調査概要』(一九七六年)



査報告書第二集、一九七四年)

(二七) 同 『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』五、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告八(一九七五年)

(二七) 同 『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』六、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告一(一九七六年)

(二七) 同 『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』七、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書二(一九七六年)

(二七) 同 『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』一三、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書二三(一九七八年)

(二七) 同 『旭川放水路(百間川) 改修工事に伴う発掘調査』I、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告三九(一九八〇年)

(二七) 同 『山陽自動車道建設に伴う発掘調査』二、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告四二(一九八一年)

(二七) 岡山市教育委員会 『足守庄荘園遺構緊急調査』延寿寺跡第二次発掘調査概報(一九七九年)

(二七) 広島県教育委員会 『山陽新幹線建設地内遺跡発掘調査報告』(一九七三年)

(二七) 同 『草戸千軒町遺跡一九七二年度発掘調査概報』(一九七三年)

(二七) 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 『草戸千軒町遺跡』第一〜一四次発掘調査概要(一九七四年)

(二七) 同 『草戸千軒町遺跡』第一〜一七次発掘調査概要(一九七五年)

(二七) 同 『草戸千軒町遺跡』第一八〜二〇次発掘調査概要(一九七六年)

(二七) 同 『草戸千軒町遺跡』第二一〜二三次発掘調査概要(一九七七年)

(二七) 同 『草戸千軒』第五卷、No.46〜57(一九七八年)

(二六) 同 『草戸千軒』第六卷、No.58〜69(一九七九年)

(二六) 同編 『草戸千軒町遺跡』一九七八、第二四〜二六次発掘調査概要(一九八〇年)

(二六) 福山市教育委員会 『草戸千軒町遺跡』(一九六五年)

(二六) 村上正名 『草戸千軒』福山文化財シリーズNo.6(一九六七年)

(二六) 鳥取県教育文化財団 『長瀬高浜遺跡』Ⅳ、鳥取県文化財団調査報告書六(一九八一年)

(二六) 同 『布勢遺跡発掘調査報告書』鳥取県文化財団調査報告書七(一九八一年)

(二六) 広瀬町教育委員会・富田河床遺跡調査団 『富田川床遺跡』(一九七七年)

(二六) 下関市教育委員会 『新下関駅周辺遺跡発掘調査概報』(一九七四年)

(二六) 同 『秋根遺跡』(一九七七年)

(二六) 同 『長門国府』長門国府周辺遺跡調査報告Ⅱ(一九七八年)

(二六) 同 『長門国府』長門国府周辺遺跡調査報告Ⅲ(一九七九年)

(二六) 山口県教育委員会 『塚本古墳・秋根遺跡・石原遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第一七集(一九七三年)

(二六) 同 『堂道・五反地遺跡』(一九七三年)

(二六) 同編 『下右田遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第四六集(一九七九年)

(二六) 同編 『下右田遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第五三集(一九八〇年)

(二六) 山口市教育委員会 『周防鑄銭司跡』(一九七八年)

(二六) 同 『大内氏館跡』Ⅲ、山口市文化財調査報告第一集(一九八一年)

(二六) 香川県教育委員会 『香川県埋蔵文化財調査年報』(一九七九年)

- (三〇三) 同 『香川県埋蔵文化財調査年報』昭和五四年度(一九八〇年)
- (三〇四) 甘木市教育委員会『秋月城跡』甘木市文化財調査報告第九集(一九八一年)
- (三〇五) 鏡山猛『北九州の古代遺跡』(一九五六年)
- (三〇六) 春日市教育委員会『赤井手遺跡』春日市文化財調査報告書第六集(一九八〇年)
- (三〇七) 北九州市教育文化事業団・北九州市教育委員会『辻田遺跡』北九州市文化財調査報告書第三五集(一九八〇年)
- (三〇八) 同 『勝円B遺跡』北九州市文化財調査報告書第三八集(一九八〇年)
- (三〇九) 九州歴史資料館『大宰府史跡昭和四七年度発掘調査略報』(一九七三年)
- (三一〇) 同 『九州歴史資料館年報』昭和四八年度(一九七四年)
- (三一〇) 同 『大宰府史跡』第三〇・三一・三二次調査概報(一九七四年)
- (三一一) 同 『大宰府史跡』昭和四八年度発掘調査概報(一九七四年)
- (三一二) 同 『大宰府史跡』昭和四九年度発掘調査概報(一九七五年)
- (三一三) 同 『大宰府史跡』昭和五〇年度発掘調査概報(一九七六年)
- (三一四) 同 『大宰府史跡』昭和五一年度発掘調査概報(一九七七年)
- (三一五) 同 『大宰府史跡』昭和五二年度発掘調査概報(一九七七年)
- (三一六) 同 『大宰府史跡』昭和五三年度発掘調査概報(一九七七年)
- (三一七) 同 『大宰府史跡』昭和五四年度発掘調査概報(一九八〇年)
- (三一八) 同 『大宰府史跡』昭和五五年度発掘調査概報(一九八一年)
- (三一九) 久留米市教育委員会『埋蔵文化財調査概報』久留米市文化財調査報告書第一九集(一九七八年)
- (三二〇) 同 『筑後国府跡』久留米市文化財調査報告書第二〇冊(一九七九年)
- (三二一) 同 『筑後国分寺跡』Ⅱ、久留米市文化財調査報告書第二四集(一九八〇年)
- (三二二) 同 『筑後国府跡』久留米市文化財調査報告書第二六集(一九八一年)
- (三二三) 同 『筑後国分寺跡』Ⅲ、久留米市文化財調査報告書第二七集(一九八一年)
- (三二四) 同 『久留米東バイパス関係埋蔵文化財調査報告』久留米市文化財調査報告第二八集(一九八一年)
- (三二五) 同 『埋蔵文化財調査報告』第一集、久留米市文化財調査報告第二九集(一九八一年)
- (三二六) 福岡県教育委員会『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第二集(一九七五年)
- (三二七) 同 『今宿南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第四集(一九七六年)
- (三二八) 同 『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第三集(一九七六年)
- (三二九) 同 『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XIV(一九七七年)
- (三三〇) 同 『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XV(一九七七年)
- (三三一) 同 『三雲遺跡』Ⅰ(一九八〇年)
- (三三二) 同編 『今光遺跡・地余遺跡』(一九八〇年)
- (三三三) 福岡市教育委員会『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告第三二集(一九七五年)
- (三三四) 同 『蒲田遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告第三三集(一九七五年)
- (三三五) 同 『有田周辺遺跡調査概報』福岡市埋蔵文化財調査報告書第四三集(一九七七年)
- (三三六) 同 『板付遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第四九集(一九七七年)

九年)

〔三七〕 同 『多々良込田遺跡』Ⅱ、福岡市埋蔵文化財調査報告第五三集 (一九八〇年)

〔三八〕 同 『板付周辺遺跡調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告第五七集 (一九八〇年)

〔三九〕 同 『有田・小田部』福岡市埋蔵文化財調査報告第五八集 (一九八〇年)

〔四〇〕 同 『板付周辺遺跡調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第六五集 (一九八一年)

〔四一〕 同 『博多』Ⅰ、福岡市埋蔵文化財調査報告書第六六集 (一九八一年)

〔四二〕 同 『板付』福岡市埋蔵文化財調査報告書第七三集 (一九八一年)

〔四三〕 森貞次郎・岡崎敬 『福岡県板付遺跡』『日本農耕文化の生成』本文篇、一九六一年)

〔四四〕 芦刈町教育委員会 『小路遺跡』芦刈町文化財発掘調査報告書 (一九八〇年)

〔四五〕 唐津市教育委員会 『久里大牟田遺跡』唐津市文化財調査報告第一集 (一九八〇年)

〔四六〕 神埼町教育委員会 『利田柳遺跡Ⅲ区』神埼町文化財調査報告書 (一九八〇年)

〔四七〕 佐賀県教育委員会 『石木遺跡』佐賀県文化財調査報告書第三五集 (一九七六年)

〔四八〕 同 『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財確認調査報告書』佐賀県文化財調査報告書第三七集 (一九七七年)

〔四九〕 同 『下中杖遺跡』佐賀県文化財調査報告書第五四集 (一九八〇年)

〔五〇〕 同 『尾崎利田遺跡』佐賀県文化財調査報告書第五五集 (一九八〇年)

〇年)

〔五一〕 鳥栖市教育委員会 『長ノ原遺跡調査概報』鳥栖市文化財調査報告書第五集 (一九八〇年)

〔五二〕 熊本県教育委員会 『境古墳群・境遺跡』熊本県文化財調査報告書四二集 (一九八〇年)

〔五三〕 同 『平原・野中遺跡』熊本県文化財調査報告書第四三集 (一九八〇年)

〔五四〕 同 『興善寺』Ⅰ、熊本県文化財調査報告書第四五集 (一九八〇年)

〔五五〕 群馬県教育委員会 『下郷』 (一九八〇年)

〔五六〕 朝倉氏遺跡調査研究所 『一乗谷朝倉氏遺跡』Ⅱ (一九八一年)

〔五七〕 滋賀県教育委員会 『湖南中部流域下水道管理用道路関連遺跡発掘調査報告書』Ⅰ、虫生工区 (一九七八、九年)

〔五八〕 同 『埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅰ (一九八〇年)

〔五九〕 瓜生堂遺跡調査会 『瓜生堂遺跡』 (一九七一年)

〔六〇〕 難波宮址顕彰会編 『森の宮遺跡』 (一九七八年)

〔六一〕 同 『難波宮址研究調査年報』一九七四 (一九七六年)

〔六二〕 大阪府教育委員会 『大阪文化財センター』『長原遺跡』Ⅰ (一九七六年)

〔六三〕 長原遺跡調査会編 『長原遺跡発掘調査』資料編 (一九七六年)

〔六四〕 同 『長原遺跡』 (一九七八年)

〔六五〕 大園遺跡調査会 『大園遺跡』発掘調査概報二 (一九七六年)

〔六六〕 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会 『昭和五四年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 (一九八一年)

〔六七〕 山口県教育委員会編 『下右田遺跡』 (一九七八年)

〔六八〕 福岡県教育委員会 『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第六集 (一九七七年)

# A Study on the well in Japan

by

Takao Uno

Water is indispensable for human life. Especially when they settle down and make cities, the problem of obtaining water becomes more and more important. So it often happens that they make wells. In this article, I classified the types of the well and assessed their dates.

Consequently, I can clarify that the well became populer since the *Yayoi* 弥生 period, as a rice cropping one, and that four periods are discernible as follows.

- 1) From the *Yayoi* period to the *Kohun* 古墳 period; the merely digged well without armature was dominant though the wooden well was used.
- 2) Ancient Ages (*Nara* 奈良, *Heian* 平安); the wooden well was dominant.
- 3) Middle Ages (*Kamakura* 鎌倉, *Muromachi* 室町). the stone well.
- 4) Modern Ages (*Edo* 江戸, *Meiji* 明治); the bricks well in addition to the stone well.

Moreover, considering the diffusion process of new types and the main diffusion areas, we can suppose other durations.

As to the diffusion process:

- 1) The diffusion of the wooden well from the late *Yayoi* perod led to the dominance of the wooden well in the early Ancient Ages.
- 2) The decline of the wooden well from the late Ancient Ages led to the dominance of the stone well in the late Middle Ages.
- 3) The spread of the bricks well from the early Modern Ages led to the dominance of the concrete well in the late Modern Ages.

As to the main areas:

- 1) From the late *Yayoi* period to the early Ancient Ages; the south of *Kinai* 畿内 played an important part.
- 2) From the late Ancient Ages to Middle Ages; the north of *Kinai*.
- 3) Since Modern Ages; the south of *Kinai* again.